

北海道医師会役員  
退任のご挨拶

## 退任ご挨拶

前常任理事

山本直也



退任のご挨拶を申し上げます。

一身上の都合により、平成21年3月を以て北海道医師会常任理事から身を引くことになりました。飯塚前会長、長瀬会長のもとで、健康教育・医療安全等の医師会活動に従事させていただき、多くの諸先輩ならびに医師会事務局の皆様方のご指導ご協力のもとで、大過なく無事に任を全うできましたことに、心より御礼申し上げる次第です。今後は地域医師会ならびに地域医療の現場にて、一医療者として努力をして参りたいと思います。

今後の北海道医師会の益々の発展と皆様方のご活躍とご健勝を祈念いたしまして、退任の挨拶に代えさせていただきます。長い間お世話になり誠にありがとうございました。



## 常任理事退任のご挨拶

前常任理事

西里卓次



このたび、北海道医師会常任理事を退任することとなりました。1期2年という短い期間ではありましたが、会員の皆様には大変お世話になり、誠にありがとうございました。札幌市医師会から推薦していただき、思いもよらず道医の常任理事という大役を務めさせてもらったことは、身に余る名誉であったと感謝しております。

常任理事になってまず驚いたことは、長瀬会長の方針もあってか、事務局から洪水のように渡される膨大な資料の量でした。ざっと目を通すのもやっという勢いで増えていき、私の机はあつという間に積み上がった資料で完全に埋没してしまいました。初年度ということもあったのですが、諸先輩の先生方はどうやってこの資料の山に対処したのかという思いでした。もちろん、適切な資料を次々と提供する事務局の仕事もさぞかし大変なものであったのではと思います。

道医の常任理事には、同時期に札幌から副会長に就任した畑先生や総務部長となった深澤先生もおられました。同じ支部の三戸先生や、札幌で一緒した目黒先生もおられて心強い限りでした。また、他の理事の先生方も極めて紳士的であり、懇切丁寧にご指導を賜りました。ただ、理事会では時に遠慮のない、結構手厳しい論議もあったのは当然というか、さすがとも感じたことでした。常任理事としての活動の中で、会員の先生方とともに研修会や懇談会を開催することもたくさんありましたが、最も多かったのは他団体や行政の担当部門との会議ではなかったかと思います。そのような会議の経験はあまりなかったので、諸先輩のご指導や事務局のサポート無しではやって行けず、文字通り手とり足とりで、本当に助けていただきました。就任後少し時間が経過してから分かってきたのですが、これらの会議の内容は、相手のあることでもあり、周囲に話したくても話せないことも多いのだということでした。理事会内部はともかく、会員の先生方や関係諸機関への情報の提供や共有、広報という観点で考えると、微

妙なタイミング等を間違えずに対応する必要性があることで、道医の仕事の難しさの一端をあらためて実感した次第です。また、道医の意見や立場を、行政等の立場の方に分かっていただくよう対応することも時にはとても難しい仕事でした。

北海道医師会では、地域福祉部、産業保健部、医療保険部の仕事をさせていただきました。地域福祉部では、主に介護保険関係の仕事ですが、主治医研修会は自分自身の仕事の振り返りにもなりました。療養型病床の問題は、今後ますます重要になるのではと思います。産業保健部では、小山先生ご指導のもと「一般医のためのうつ病治療ガイドライン」をまとめる過程をみることができました。専門委員の先生方の医療レベルの高さを再認識した貴重な機会でした。医療保険部の仕事では、診療報酬に関するものが最大のテーマでしたが、指導・監査のことも重要な問題と思われまます。指導対象となる会員の先生方の負担等からも、さまざまな面で大きな影響があり、適切な指導の実施が望まれるところです。一方、監査結果としての行政処分等の報道などの内容によっては、保険診療に対する患者さんや市民の信頼を損なう可能性も懸念されます。国民皆保険制度を守るためにも、保険診療の基本的ルール的重要性を、今一度会員の先生方に理解していただければ幸いです。

今後は、都道府県単位の考え方が、良し悪しは別として、医療のさまざまな分野においてますます強まる可能性が予想されます。従って、道医の仕事はさらに重要になって行くものと思われまます。課題が山積する時に、退任させていただくことは、誠に申し訳ありませんが、何卒ご理解を賜りますようお願い申し上げます。北海道医師会の今後の発展と、会長をはじめとする理事の諸先生方と事務局の皆様方のご健勝を心からご祈念申し上げて退任にあたってのご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

## 理事退任にあたって



前理事

上 埜 光 紀

平成15年4月、中央ブロック選出の道医理事に就任以来、3期6年、このたび理事を退任することになりました。この間、中央ブロック、特に札幌市医師会の先生方には力強いご支援をいただき大過なく任務を終えることができ感謝申し上げます。

理事任期中の印象深い出来事に2回の日医会長選挙がありました。

平成16年、坪井執行部の後を4人の候補者で争うことになり、当然北海道ブロック推薦の当時の日医副会長青柳俊氏を推し戦いました。札幌市の提案で開催しました「13大都市医師会主催の立会演説会」や、manifestoの発表など政策を争う選挙戦となり、政策通で論客の青柳氏有利に選挙を進めました。青柳氏は知名度とリーダーとしての資質を備えた候補者として、東京、大阪、名古屋と多数の日医代議員を擁する3候補者に対し互角以上の戦いで終盤戦を迎えましたが、残念ながら、野合とも言える3派連合に敗れました。

植松執行部の2年間を省みますと、日医総研の機能低下を始め、政府や厚労省の打ち出す医療制度改革に対する執行部の対応に疑問を持ちました。医療問題の大半が政治の場で決められます。日医推薦で多くの会員の支持で選ばれた武見・西島両参議院議員との確執も聞こえ、日医を変えるには行動力とリーダーシップを持った東京都医師会の唐澤会長に託するのが一番であると判断しました。

2回の会長選挙で全国各地の医師会を訪問し、多くの会長、役員の方と意見交換を行うことができました。このような機会を得られた幸運に感謝しています。

また、真剣に取り組んだ問題の一つに新医師臨床研修制度の見直しがあります。この制度が地域の医療崩壊の契機となったのは周知のとおりです。地方の医療が崩壊すると、地方そのものが崩壊する危機感から、あらゆる機会を、一年短縮を含めた見直しを主張した結果、日医も厚労省も動き、やっと今の状況になったと思います。

理事在任中は医療保険制度改革や介護保険制度改革など社会保障制度を巡る大きな流れの時代でした。この間、会員諸兄のご支援をいただき、情熱を失うことなく、医師会活動を続けることができましたこと、ありがたく思っています。



最後に北海道医師会の益々の発展と会員の皆様のご健勝、ご活躍を祈念して退任のご挨拶といたします。

## 理事退任のご挨拶

前理事

上 西 仁



このたび、3月末日をもって道医理事を退任いたしました。中央ブロックからの推薦を受け、石狩医師会から1期2年間の短い期間ではありましたが、地方開催での会議を含め2カ月に1回の全理事会に出席し、地域医師会では経験できない貴重な勉強をさせていただきました。今後は、この体験を生かし、一会員として多角的な方面から医師会活動に尽力していきたいと思っています。

最後に、任期中に賜りました諸先生方のご厚誼に対して厚くお礼申し上げ、退任のご挨拶といたします。



## 退任ご挨拶

前理事

城

守



後志ブロック選出理事として、2期4年間、曲がりなりにも任期を務めることができました。また、この間日本医師会代議員、母子保健検討委員会委員として、道医ならびに日医の会務の一端に触れることができ、郡市医師会の枠を超えた医療・福祉の勉強をする機会を得たことは幸いでした。飯塚前会長、長瀬会長をはじめ役員ならびに職員の方々にご指導・ご協力をいただいたことにお礼を申し上げます。

経済、社会環境、医療など、多くの面で大都会と地方とでは異なり、格差があります。また、それぞれの地方でも特徴、差異があり、北海道は首都から離れ、積雪のある寒冷地、広大な土地に住民も医療機関も散在するなど特別な事情を抱えております。これらは大都会あるいは北海道より南に住む人達には理解されにくいものであると痛感しました。同じように、北海道内においても、都会地と地方との実情の差は大きなものがあります。道医代議員会あるいは各種委員会などでそれぞれの問題点を提示し、積極的な発言が必要と感じました。

ある調査によると、医師を信用している国民の比率は89%です。しかし、日本医師会は43%で、マスメディア、厚労省、政党・国会議員のそれよりは高率ですが、団体となると個人の半分以下です。各種医師会に対する医師の信頼感ですら、勤務医はもとより開業医でさえ十分とは言えません。自分自身の体験からも、医師会活動に委員や役員として実際に参加して初めて医師会の目的や内容が分かり、重要性が理解できました。同様のことが、他の多くの方々からも異口同音に言われております。

医師会活動に、多くの医師、特に勤務医、女性医師、若手医師が積極的に参加していただくことが不可欠です。それがなくては、医師会は衰退あるいは分裂が起こります。この度の日医代議員会においても勤務医、女性医師への支援あるいは医師会活動への参画について提言がなされておりました。これが今後の大きな課題と思います。

そして医師会実務活動は先見性のある柔軟な頭脳を持つ若い方々に委ねるべきと思います。高齢の医師は、それぞれに今まで培ってきた経験と実績を駆使することにより、地域医療の現場でそれなりに貢献できます。そのことが医師会活動の根底を支えることになると思います。



奇しくも退任の3月31日は、50数年間86歳まで地域医療に生涯を捧げ、北海道地域貢献賞を受賞された渡辺太郎先生のお別れの日でした。先生と同年輩と思われる女性が、“先生、沢山助けてくれたもんね～、本当にありがとうございます。それなのに、先生を助けてあげられなくて、ごめんね～。”と、先生の頬を何回もさすっている情景は、地域医療のあり方を如実に示すものでありました。

## 理事退任ご挨拶

前理事

吉田 征夫



平成21年3月31日をもって帯広市医師会会長を退任することとなり、北海道医師会理事も退任することとなりました。

2期4年でしたが、本当に充実した時間を与えていただきましたと感謝を申し上げます。

帯医理事会と道医師会代議員会・全理事会は、年間スケジュールの中で最重要の日々でした。土曜日、午前中の診療終了後、帯広発12時52分スーパーおおぞら8号に乗車し、代議員会・全理事会に出席するのが常でした。時には日勝峠の横風を心配する時期もありましたが、天の配分にも恵まれました。

飯塚前会長、長瀬現会長の強力なリーダーシップのもとで、執行部内の意見統一がされ、道医の見解が示されるこの会議の真摯な雰囲気、議論など地元の帯医へ伝えられたかは、自信がありませんが、非常に有意義な時間でした。

この間、多くの先生(郡市医師会長)との出会い、多くのご助言、ご意見をいただき、誠にありがとうございました。また、事務局の皆様にもお世話になり御礼申し上げます。

北海道医師会員の皆さまのご活躍とご健勝を心からお祈り申し上げます。

## 役員退任挨拶

前理事

西池 彰



平成17年4月1日より、釧路市医師会長の就任と同時に、北海道医師会理事の末席を2期4年間にわたり汚すことになりました。

釧路市医師会副会長を4期8年間務めた間、北海道医師会代議員として出席させていただき、道医師会が関与する北海道全体にわたる膨大な問題の解決に挑む、代議員の真剣さに大変驚き、今までの安易さを恥かしく思ったものでした。

しかし、理事に就任して以来、代議員会に提案される全道的な問題全てについて、頻回の常任理事会、全理事会において、膨大な資料に基づいて、詳細な討議がなされていることにさらに感嘆した次第です。常任理事の方々の苦勞に対しては只々、頭が下がる思いです。

それがさらに日本医師会代議員となり、4年間にわたり出席させていただくことになりましたが、そのスケールの大きさと、事の重大さをさらに認識することができました。このままでは駄目になる、何とか改善しなくてはならないという思いが、次第に増幅してきたのでした。

私の重大な体験の1つとして、北海道有床診療所協議会副会長であった平成16年に、全国の有床診療所連絡協議会総会を札幌で開催することになりました。当時の中野会長がご病気で倒られたため、会長代行の重責を負うことになったのですが、飯塚前会長をはじめとし、北海道医師会の皆様の大変温かいご協力をいただいたことが、誠にありがたく、生涯忘れられないものとなりました。

また、理事になってからは、平成18年の日本医師会会長選挙戦の際には、全国各地の都道府県医師会間の壮絶な選挙戦を体験し、自然と闘争心が湧いてきたものでした。平成16年度の青柳副会長の会長選の苦い記憶が甦り、多に勉強になったと思っております。

もう1つの重大な体験として、平成18年9月の日本医師会臨時代議員会において、有床診療所問題について、北海道医師会からの個人質問の1題として私が指名されたことは貴重な思い出となりました。

ただ、私のごとき、遠隔にある郡市医師会会長は、北海道医師会理事としては、あまり役に立たなかったことに大変申し訳なく思っております。

その当時、釧路市医師会にとっては、今までにな

い危機的な問題が山積みしておりました。特に救急医療問題は、その後の釧路市の救急医療体制を大きく変革させることになったのです。

救急医療の大半を担っていた釧路市医師会病院の中から、まず、消化器内科医があまりの過酷な激務に音を上げたことから、この問題が端を発したのでした。結局、釧路市救急医療体制検討委員会が中心となり、全市を上げて再三の協議の末、釧路市夜間急病センターの設立、2次救急医療体制の確立により何とか落ち着くことになりました。

しかし、この他に医師会としては、釧路市医師会看護専門学校設立と医師会病院経営の問題が大きく存在し、多忙を極めておりました。前者は順調に解決したものの、後者は循環器内科医の減数により経営の行き詰まりを生じ、さらに平成21年度からは、循内、消内、消外3科とも、出向医の目途がつかなく

なり、医師会が医師会病院の経営から、撤退することになってしまいました。

このような、自分たちの医師会の問題に追い回され、理事としてあまり貢献できなかったことを残念に思っております。

ただ、平成18年度より、日本医師会の「有床診療所に関する検討委員会」の委員として任命され、務めさせていただきました。

長瀬会長をはじめ理事の皆様方には、4年間にわたり、色々のご指導、ご協力をいただきましたことに深くお礼を申し上げる次第です。

これからは、釧路市医師会病院を引き継ぎ、釧路三慈会病院の理事長として、残された全エネルギーを、これに燃焼させ、少しでも地域に貢献する所存でございます。

## 退任のご挨拶

前監事

高木正光



平成15年4月、北海道医師会監事に就任し、3期6年間の長きにわたり役員を務めさせていただきました。

北海道医師会定款に「監事は会務および財産状況を監査する」とあります。

道医の各事業は会員の会費により運営されていて、そのため預かった会費が適法適正に保管され、各事業が予算に正確により効率的に執行されていることの確認が責務でありましょう。

月二度の定例常任理事会に出席し多くの色々のことを勉強させていただいた。

常任理事の方々には個人的に教授、理事長、病院長等の職務を行った上での理事会の仕事、北海道の各種の委員会、協議会、日本医師会の理事等の兼務をしていることを知り、感服の6年間でした。

監事として、6年間、特別のトラブルもなく大過なく職責を果たすことができました、これは監事の水元先生、中村先生そして北海道医師会長長瀬先生はじめ道医の役員の方とそれを支える優秀な事務局職員のおかげと感謝しております。

昨年4月、小樽市より黒枠はないが、「後期高齢者医療制度該当者」の通達があった。読んで愕然とした。医療費抑制のための制度であろうが、医学医療が進めば若い人の病気は減り寿命は延びて長患いで伏す

老人が増加するのは自然であろう。これを「老いては麒麟も驚馬に如かず」（史記）と厄介もの扱いするのはご都合主義に過ぎるのではなからうか。

率直に言って、若い人に大きな負担を掛けてまでこれ以上寿命を延ばすことにどれだけ意義があるのか考えることがある。しかし人間が集まり合っているこの世の中、最後に必要となるのはお互い同士の思いやり、相手をいたわる心ではなからうか。

将来、高齢者の受けられる医療が制限され、アメリカのように医療に市場原理が導入されることだけは防がねばならない。国民が「いつでも」「どこでも」平等に医療が受けられる日本の優れた医療保険制度は守り抜きたいものである。

超少子高齢化社会の到来、医師不足、地域医療の崩壊等の解決すべき問題が山積み、本当にここ数年が日本医師会をはじめ医療界にとって重要な時になるでしょう。この医療情勢の極めて厳しい折、退任することは激戦の最中に戦列を去る思いで申し訳ない心境です。「老兵は死なず、消え去るのみ」という言葉もあります。お許しいただきたい。

今日までのご指導に衷心より厚く御礼申しあげます。ありがとうございました。

皆様の益々のご健勝ご活躍と北海道医師会の益々の発展をご祈念申しあげ挨拶といたします。